

耳がキレギレに閉されるような冷さだ。

足は痺れてゐる。

『可愛そうだ、さよなら』

けれどもグルーミイな星のまたゝきは、僕の悲哀に油を注ぐようなものだつた。

胸の腫れるような寂寞と孤獨の念に僕は襲はれた。

『お前の娘を俺は小さい時に戀した事がある。お前は未だに肉の執着を絶たないから、目が潰れたり、熱が出たりするのだ』

僕は観音の秘力で癒してやると言つて、風邪でねてゐる初戀の女の父の枕邊に上り込んで言つた事もある。

段々頭の調子が悪くなつて、僕の亂行も日に日に加つて行つたとても言はふか。

大晦日の晩は酒井と、M太郎とM千代を呼んで、丸北の三階でドンチャン騒ぎをした。

へゞれけに酔つて昂奮したM太郎に、掻き裂かれたり抓られたりして、僕は浅い縁感を得た。